法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-04-26

「特異的普遍」としての知識人 : 加藤周一がサルトルから学んだこと

Takemoto, Kenji / 竹本, 研史

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei Journal of Sustainability Studies / 人間環境論集
(巻 / Volume)
20
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
27
(発行年 / Year)
2020-03-23
(URL)
https://doi.org/10.15002/00023040

「特異的普遍」としての知識人

加藤周一がサルトルから学んだこと[1]

竹本　研史

はじめに

戦後知識人として名を馳せた加藤周一（1919-2008）が亡くなって10年以上が過ぎた。加藤周一が、血液学を専門とする医学生、そして東京大学付属病院の副手へと、そのキャリアを形成してきたことは有名であるが、『羊の歌』などに見られるように、同時に戦前から、渡辺一夫をはじめ、中島健蔵、鈴木信太郎、辰野隆などが教鞭をとっていた東京大学の仏文研究室に出入りして、深くフランス文学・文化に親しんできたこともまた有名である[2]。彼は、1951年に第2回フランス政府給費留学生の「半給費生」として渡仏した。そのときは、あくまで医学留学生としての留学であったが、米国留学を選ばずに、「医学研究のことを離れても、その国の本を読みつづけたフランスへ行き、しばらくそこで暮すことができる機会」を生かしたためであった[3]。彼は帰国後、「格物致知」を完遂させようとした。しかし、「画を眺め、書を読むのに、時間をかける」には、病院に通いながら徹夜で作文をつづけているようでは、その時間に充てられることはできないと考えた。そこで、1958年に中央アジアのタシュケントで行われた第2回アジア・アフリカ作家会議に参加したことを契機に、医業を捨てることにした[4]。

そのときのことを加藤は次のように振り返っている。

私は血液学の専門家から文学の専門家になったのではない。専門の領域を変えたのではなく、専門化を廃したのである。そしてひそかに非専門家の専門家を志していた[5]。

加藤が、自身を《アマチュアリズムの専門家》として自らを定義づけた、この有名な文言はその後の加藤のスタンスのみならず、彼の「知識人」としてのありようを象徴していると言えるだろう。じっさい彼は、その後、フランス文学の専門家として続けて行くというよりは、さらに広く日本文学・日本文化への探究まで深めていくことになった。

このように、彼をして自身のゆく道を選択せしめたのは、もちろんフランス文学による自己陶冶が背景にあったのはいうまでもないだろう。海老坂武の分類に従うならば、1：シャルル・ボードレール、ポール・ヴァレリーなどの象徴主義の詩人たち、2：『ユーロップ』誌を発言の舞台にした、ロマン・ロランをはじめとする両大戦間の反ファシズム運動の一翼をなした作家たち、3：アンドレ・マルローとサルトル、4：ルイ・アラゴン、ポール・エリュアールなどのレジスタンスの作家たち、5：ジャン・ジロドゥー、アルベール・カミュらの新しい演劇作家たち、以上の5つの系統の作家たちに若き加藤の主たる関心があった[6]。彼はまた、サルトルの『文学とは何か』などの翻訳もおこなっている。

海老坂は、加藤がフランス文学に関心を抱いた理由として、次の4点をあげている。1つは幼少期からの家庭環境、2つめは、中村真一郎、福永武彦という、「マチネ・ポエティク」というグループで一緒だった友人を持ったこと、3つめは、一高時代の加藤の先生であり、ロマン・ロランの翻訳者でもあった片山敏彦の存在、4つめは、東大仏文科の研究室に出入りしていたこと[7]。

一方、そのなかでも加藤周一において、ヴァレリーと並んで、サルトルは特権的位置を占めていた。たとえば、加藤は「西洋文学とは何か」（1988年）というテクストのなかで、西洋文学の日本文化、とりわけ近代日本文学への影響を取り上げ、その受容の歴史を4つの時期に分けている[8]。なかでも、「第二次世界大戦後今日に到る」「第四の時期」に、西洋文学から最大の影響を受けたものとして、一時期のサルトルを通じた、大江健三郎をはじめとする文学者の「アンガー

ジュマン」の思想を挙げている[9]。

加藤周一は、戦中の抑圧から解放され、戦後サルトルの自由の哲学に大きな影響を受けた。加藤が、サルトルからとりわけ影響を受けたものとして、知識人論が挙げられる。加藤は「知識人」のあり方について、つねに抑圧されるものの側に立ち「普遍性」と「特殊性」[10] の緊張関係を自覚した「知識の技術者」たるべきだと確信していた。じつは、こうした知識人像は、「特異的普遍」と呼ばれる後期サルトルの主要概念の本質が反映されており、歴史に対する関係のなかで特異性にも普遍性にも還元されない個人のあり方を指し示している。加藤は知識人としてのあるべき姿について、「マチネ・ポエティク」の頃から一貫して関心を抱いていた[11]。

加藤周一の知識人論には、さまざまなアプローチがある。たとえば、「知識人について（西欧の知識人と日本の知識人）」［1957 年］の分析による日欧知識人比較や、「戦争と知識人」［1959 年］を通じた大戦中の知識人の態度についての考察、ほかには、加藤による竹内好論や林達夫論からのアプローチもあろう。

本稿はそのなかでも、サルトルと加藤周一との結びつきに着目するものである。加藤周一の「サルトル私見」を中心に分析することによって、彼が、サルトルの「特異的普遍」概念から、知識人論の何を吸収し、どのようにその変化に対応していったかを討究することが目的である。

ここで、本稿に関連する先行研究について概観しよう。まず、加藤周一とフランス文学との関係については、フランス文学者の立場から数多くの先行研究が発表されたものがある[12]。とりわけ、加藤周一とサルトルとの関係を取り扱ったものでは、まず片岡大右が、加藤とサルトルとのド・ゴールに対するスタンスの違いを浮き彫りにする重要な指摘をするなど、加藤周一が「サルトルの時局的判断のあれこれにつねに従っていたのではない」と述べて加藤とサルトルとの関係の相対化を図っている。そのうえで片岡は、「加藤周一がサルトルのうちにとりわけ見定めようとしたのは、自由を求める一精神が、与えられた状況のなかでその制限を受け入れる地点だったといってよい」と意義づけている[13]。また 2019 年 9 月には、日仏会館で開催されたシンポジウム「加藤周一の知的遺産と世界の中の日本」において、澤田直が、サルトルの「独自的普遍」（＝「特異的普遍」）

に着目し、同概念が与えた加藤周一への影響についておもに文学の観点から発表した[14]。

また、知識人論としては、成田龍一が1960年代の加藤を特徴づけるものとして知識人論を挙げ、その分析対象の1つとして、加藤の竹内好論のほかに、「サルトルの知識人論」も取り上げることによって、「知識人原論」として位置付けている[15]。また、石田をはじめとして、加藤が平凡社の『世界大百科事典』全35巻の編集長を務めていたという事実から、これを彼の知識人のありようと結びつける研究も存在する[16]。西川長夫は、加藤を「旅人＝移動する知識人」と表現した[17]。

こうした先行研究を承けて、本稿は、サルトルの「特異的普遍」が、加藤周一の思想面で、とりわけその知識人論において、彼にどのような影響を与えたかについて検討する。まず第1節で、加藤周一がサルトルの思想理解にあたり、いかに「特異的普遍」を重要視したかを論じたうえで、サルトルの「特異的普遍」を簡単に概略説明する。第2節では、加藤周一が「特異的普遍」に基づいたサルトルの知識人論をどのように理解したか、その理路を確認する。第3節では、「68年5月」を契機に、サルトルの知識人についての考え方が変化するが、加藤がその変化にどのように対応したかを考察する。

以上のプロセスにより、加藤周一の知識人論に対するサルトルからの影響が明らかとなり、ひいては、戦後民主主義という文脈に彼の思想を位置付ける一助となるだろう。

1　サルトルの「特異的普遍」と加藤周一

講談社より刊行されていた「人類の知的遺産」シリーズの『サルトル』は、加藤が編纂したものである。そこに掲載されていた「サルトル」（1984年、著作集収録時に「サルトル私見」と改題）では[18]、同書において、加藤がサルトルの主要著作を読み、加藤なりの要約をつくろうと決意した理由として3点挙げている。1つは、サルトルの名前を知っていても、彼の著作全体を読む人が少ないだろうという理由。もう1つは、人としてのサルトルに加藤が尊敬と親しみを感じ

たため。そして最後の１つが、加藤がサルトルの著作から学ぶことを、加藤自身が見極めたいと考えたからだと述べている[19]。そのうえで、加藤はサルトルの「思想的世界」において次の２点を評価している。

> 第一点は、その手法に係り、世界的・特殊的なものと、抽象的・普遍的なものとの間に、絶えず行われる弁証法的な操作である。彼が抽象的な普遍性から出発し、その水準にのみとどまったことは一度もない。また具体的で特殊な対象を、普遍性へ向って超えようとしなかったことも、決してない。
>
> 第二点は彼が解こうとして問題に係る。それは、世界の客観的な秩序と個人の経験のかけ替えのなさ、歴史の過程と人生の一回性、その二つの軸の交るところに位置づけられた人間の全体を、いかに理解し、叙述し、意味づけるか、ということである。私はそれがわれわれの時代の中心的問題であると考え、さらに時代の中心的問題に正面からとり組んだのがサルトルであったと考えて、したがってサルトルが今世紀最大の哲学者の一人であった、と考える。彼の問題の解決法が優雅だったからではない。しかし同じ問題を彼よりも優雅に解いた思想家はいなかった[20]。

ここでは、サルトルが、まず「具体的で特殊な対象」と「抽象的普遍性」とのあいだで絶えず行われる「弁証法的な操作」、あるいは往復運動を実行していたこと、これに基づき、「世界の客観的な秩序」と「個人の経験のかけ替えのなさ」、および「歴史の過程」と一個人の「人生の一回性」が交わるところに人間を理解し、意味づけることが加藤の重要な課題であったことが理解できる。また加藤は、サルトルの弁証法を、このように「具体的で特殊な対象」と「抽象的普遍性」との対立のみならず、「現実と観念」、「歴史性対一回性、組織対個人、科学的思考対感情的思考、抽象的な一面性対具体的な個物の全体性、ヘーゲル的普遍性対キェルケゴール的特殊性または個別性」といった対立軸で示し、それぞれが相互の往復運動として現れるのだと述べている。

加藤は、こうした関係を次のように、「人間の基本的な問題」として、「一箇の人間のかけ替えのなさ」と、「その人間を外から条件づける歴史的なもの」との

関係だとみなす。つまり、人間と歴史との関係だというのである。

> ここで人間の基本的な問題というのは、一箇の人間のかけ替えのなさと、その人間を外から条件づける歴史的なものとの、関係如何ということである。同じことを、人間が歴史に超越し、歴史が人間に超越する、相互超越関係の構造如何ということもできるだろう。人間が歴史に超越する面を実存主義は語り、歴史が人間に超越する面を歴史主義は語る。一方はキェルケゴール Kierkegaard 的次元であり、他方はヘーゲル Hegel 的次元であって、その二つの次元が相互に還元されないということもできる。「人間は、あらゆる瞬間に、歴史から抜けだす」ばかりでなく、まさに「歴史のただなかにいるときに、もっとも遠く歴史から抜け出している」のである（「倫理学のためのノート」、一九四七）[21]。

加藤は、両者の関係について、人間が歴史に超越する面を実存主義が語り、歴史が人間を超越する面を歴史主義が語ると述べる。さらに、上記で見て取れるように、前者を「キェルケゴール Kierkegaard 的次元」、後者を「ヘーゲル Hegel 的次元」で捉え、「その二つの次元が相互に還元されないということもできる」とみなしている。また、別の箇所でも加藤は、「ヘーゲル的普遍性対キェルケゴール的特殊性または個別性」という二項対立で説明している[22]。とくに注目すべきは、「ヘーゲル的普遍性対キェルケゴール的特殊性または個別性」という言葉である。私たちはここで、明らかにサルトルが後期の主要概念としていた「特異的普遍（universel singulier）」のことを、そしてその「特異的普遍」という言葉を冠した彼のキルケゴールおよびヘーゲル論のテクストを想起せざるを得ない。

では、サルトルの「特異的普遍」とは何か、簡単に概略しよう[23]。サルトルは、1960 年代に、「特異的普遍」という概念を提示した。とくに 1964 年、彼はユネスコの「生けるキルケゴール」と題するコロックで発表をおこなった際の原稿は、最終的に『シチュアシオン』の第 9 巻に、文字通り「特異的普遍 universel singulier 」というタイトルで所収されている[24]。ここでサルトルは、

『方法の問題 *Questions de méthode* 』（初出 1957 年、刊行 1960 年）[25] の冒頭でも取り扱ったテーマを論じている。これらのテクストにおいて、サルトルはキルケゴール論という形式で、ヘーゲルにおける普遍的な知に対抗するため、認識や知では捉えられないような個人の「特異性」の擁護をおこなっている[26]。

サルトルは、『方法の問題』の続編と位置づけている『家の馬鹿息子 *L'Idiot de la famille* 』（1971-1972 年）の序言で、この「特異的普遍」という概念の定義付けをしている[27]。彼は、『家の馬鹿息子』におけるそのような自身の主眼を次のように理由づけている。

> それは、ひとりの人間とは、けっしてひとりの個人ではないからである。この人間を、一個の特異的普遍と呼ぶほうがよいだろう。自らの時代によって全体化され、またそのこと自体によって、普遍化されて、彼はその時代において、自らを特異性として再生産することによって、時代を再全体化する。人間の歴史の特異的普遍性によって普遍であり、自らの投企の普遍的特異性によって特異である彼は、両端から同時に研究されるよう要求しているのだ[28]。

「特異的普遍」とは、ひとりの人間が一個の個人単体で成立するものではない。ひとりの人間が、自らの生きる時代というコンテクストにおいて普遍化される。逆に、「人間の歴史」という「普遍性」のなかに産み落とされたひとりの特異な人間として、彼、彼女は、実践によって時代を再全体化する。言い換えれば、歴史という「普遍性」は特異化するのである。彼、彼女は自らを構成する時代によって普遍化されると同時に、自らの特異な投企を通じて時代を特異化する存在でもあるのである。

そもそも、サルトルがキルケゴールに自身の思想を仮託してヘーゲルに対抗するのは、キルケゴールとヘーゲルの概念上の相違を論ずるためではない。ここでわれわれは、サルトルが、ヘーゲルとキルケゴールとの決定的差異を、前者における《認識＝普遍性》と後者における《実存＝特異性》として捉えていることに着目しよう。すなわち、個人の「特異性」が知へとすべて還元されるものではな

いということを示すことによって、知が全能であるという考え方を批判しようとしているのである。もちろんサルトルは、自身がヘーゲルの打ち立てた概念や歴史を含む体系から逃れられないことを知っている。「認識」によって特異な出来事を〈歴史〉へ還元するとき、「特異性」は抹消される。ところが、ヘーゲルであれば、発展途中にある矛盾として乗り越えるべき観念だとみなすような人間の苦悩や欲求、そして情念といったものを、ひとりの人間の持つ特異で不透明な主観性が持ち、認識によって乗り越えることのできない「生(なま)のままの現実（réalités brutes）」[29] としてサルトルは重要視している。

2　加藤周一によるサルトルの知識人論理解

以上、ごく簡単にではあるが、サルトルの「特異的普遍」について概略した。このサルトルの「特異的普遍」は、彼の知識人論を考えるうえでも非常に重要である。

サルトルは、1966 年 9 月に来日して 3 度の講演をおこなった。なかでも、最も有名なのが「知識人の擁護」と題したものであり、のちに『シチュアシオン』の第 8 巻に収められた。サルトルはこの「知識人の擁護」のなかで、自らが理想とする「知識人」について次のように定義している。

> ［…］知識人とは、自らのうちにも社会のなかにもある対立、つまり実践的真理の探求（およびそれが含意するあらゆる規範とともに）と、支配階級のイデオロギー（およびその伝統的価値システムとともに）とのあいだの対立を自覚する人間なのです。この自覚は、それが現実的なものであるためには、知識人において、まず、自分の職業的活動とその機能のレヴェルそのものにおいて生じるべきものではありますが、社会の根源的矛盾の開示、すなわち階級間のコンフリクトの開示にほかならず、また支配階級それ自体のなかにも、この階級が自らの投企のために要求する真理と、自らのヘゲモニーを保障するために、この階級が維持し、その他の階級まで感染させようとしている神話・価値・伝統とのあいだで起こる有機的なコンフリクトを開示す

ることにほかならないのです[30]。

サルトルにとって、「知識人」とは、自分個人のことについても社会のことについても、「実践的真理」を探求しようとすること、ならびに、それを阻もうとする「支配階級のイデオロギー」との対立を自覚し、「他者」へと開示する者のことである。もちろん、自分個人のことというのは、「知識人」自身が置かれている階級や立場と彼自身の見据えようとする問題意識とのあいだの矛盾も含まれるだろう。彼ら、彼女らの役割とは、たとえば、階級対立や社会の根源的矛盾を明らかにすることであったり、あるいはその開示を阻もうとする支配階級それ自体についても、「神話」や「価値」や「伝統」といった目には見えない規範の分析を通じて、そのコンフリクトを露わにすることだったりする。すなわち、目に見えないコンフリクトを他者に対して可視化することが彼ら、彼女らの役割なのである。

さて、サルトルは次のように、「特異的普遍」としての「知識人」のありようを次のように意義づけている。

> 彼［知識人］が情況づけられ、「恵まれない」階級もやはり情況づけられている以上、まだ普遍的知の技術者として役立つのではない。そうではなくて、知識人における自覚が、自らの階級的個別主義と、それと矛盾する普遍性という課題との開示、それゆえこの個別的なものから出発してその個別的なものの普遍化へと向かう、自らの個別性の乗り越えの開示である以上は、まさしく特異的普遍として役立つのです[31]。

繰り返すが、「知識人」も、労働者階級も、どちらもそれぞれの「情況」に制約されている。それゆえ、「知識人」は「普遍的知」を手に入れることもできなければ、労働者階級の完全な代弁者たり得ない。そのことはもちろん、「知識人」本人も自覚していることだろう。しかしながら、自らの拠って立つ「階級的個別主義」、あるいは自らの「特異性」と、「普遍的知の技術者」たらんとするための「普遍性」との矛盾をどのように引き受け、その自覚をつねにもつかが「知識人」

にとって何よりも重要である。

したがって「知識人」は、自らの「特異性」から出発して「普遍性」へと向かうべきものであり、自らの「特異性」を乗り越え克服するべきもの、そしてそのことを明らかにすることが要請される。これこそ、サルトルが「特異的普遍」としての「知識人」として、自らも含め、その役割を意義づけるものであろう。

加藤もまた、サルトルの「特異的普遍」という概念を通じて知識人のあるべき姿を打ち立てようとしていた。加藤は知識人としてのあるべき姿について、かなり若い頃から一貫して強い関心を抱き続けていた。たとえば、「マチネ・ポエティク」のメンバーである加藤および中村真一郎・福永武彦による『1946・文学的考察』に所収された「知識人の任務」[1947年]のなかで、次のように、若き加藤周一による戦中の「知識階級」の無責任かつ自己保身的な態度に対する怒りが迸っている箇所がある(32)。

> 知識階級にとっては、如何。専修大学を卒業して田舎へ帰り、村の翼賛壮年団長となっていた地主の息子、東京帝国大学法学部を卒業して高文を通り、目出度く役人となって、結婚し、軍国主義だろうと何主義だろうととにかく出世をするために、頭を刈上げ、ゲートルを巻き、それで安心しながらもっともらしい口はきいたが、実は何も解っていなかった成上がり官僚、科学尊重の空念仏に多年の不遇が酬いられたかのような錯覚を抱き、有頂天となって世にも愚かな日本の科学の何国にもひけをとらぬ所以などを口走っていた小学生のような科学者、そして殊に、総動員法にも宣戦布告にも拍手した代議士、又大勝利のデマを軍人が製造すると忽ち二つに割れた軍艦の見て来たような嘘を書きあげた絵かきや、シンガポール陥落だの配給のさつまいもだのと云う破廉恥な詩を無数に吐き出した詩人、勤王だの慟哭だの絶叫して社会のアタヴィスムを煽動した帝国主義イデオローグの群、――彼等は、一体戦争を怖るべきものと考えたであろうか。知識階級も又、戦争を怖るべきものとして理解せず、怖るべきものとして体験しなかった(33)。

戦中の抑圧から解放され、戦後サルトルの自由の哲学に大きな影響を受けた加

藤が、改めて、ファシズム体制に対して明示的にあるいは暗示的に協力を行なっていた「知識階級」の戦争責任を問い質しながら、サルトルの姿にこそ、戦後知識人のとるべき道を見出したのは当然の帰結である[34]。

サルトルが『文学とは何か』において、作家が果たすべき役割について論じていることはよく知られているが[35]、加藤はこの作品を次のようにまとめている。加藤にとって、サルトルが示す作家＝知識人がどのようなものか、その基本を抑えておこう。

> 作家にとって「アンガージュマン」が何を意味するかは、『現代』誌の創刊の辞に説明されている。作家は書き、書くことである種の影響を社会にあたえ、しかも何について書くかをみずから択ぶことができる。したがって特定の問題について書かないことも、その問題に対する作家の態度の表現である[36]。

加藤は、サルトルをそのまま踏襲して、作家は、何について書くかを自ら選択し、書くことを通じてある種の影響を社会に与えることが目的だとする。加藤はこの作家の役割をそのまま知識人の役割とイコールだとみなしている。また、書くという行為は読者の「自由」への呼びかけであり、読者は本を通じて世界を作り上げる[37]。さらに、人が人間であることを選ぶ限り、作者は、原則的にすべての読者に向けて書くが、実際には特定の読者層に向けて書くことになる[38]。その理由として、加藤は次のように解説する。「市民社会に搾取と抑圧の構造があるかぎり、作家は搾取し抑圧する側にではなく、搾取され抑圧される側に読者をもとめざるをえないだろう」[39]。

だが加藤によれば、現在の労働階級は、思想の自由にも、知識人の書く本の読者でもない。「物質的な自由」が優先されるからである[40]。加藤はこうした状況のもとで市民階級出身の作家が取りうる選択肢として３つがあるという。

> このような歴史的状況に対して、市民階級出身のフランスの作家がとり得る態度は、三つある。第一、みずからの出身階級の否認を徹底させて、形式

的な自由を抛棄する（たとえばスターリニスムの時代の共産党員作家）。しかし自由の抛棄は、書くことの意味の抛棄であるほかはない。第二、「物質的な自由」の要求を無視して、「純粋な文学」に専念する。しかしそうすれば、抑圧する側でなく抑圧される側に読者をもとめることはできない。第三、作家が歴史的な状況の二律背反を内面化すれば、作家自身が両極にひき裂かれる、――作家の自由と歴史の要請、書くことに内在的な条件と社会的な状況のなかでの撰択、個人の意識の自己実現の過程と他者の現実に対する責任、世界をつくりだす意識としての人間と世界内存在としての人間[41]。

第一には、自らの形式的な自由を放棄して出身階級を徹底的に否認すること。第二に、「物質的な要求」を無視して、純粋に文学に専念すること。第三に、両者の間の矛盾を引き受けること。加藤によれば、サルトルはあえてこの3番目の選択肢を選び取って一生のテーマとした。それゆえに、彼が20世紀を代表する思想家と呼ばれるのにふさわしいと述べるのである[42]。

先にサルトルの1966年の来日講演の1つである「知識人の擁護」を取り上げたが、加藤周一は、この講演について4つの意義を挙げている。

1つは、当時の日本の知識人が直面している課題の核心にサルトルが迫っていて、その結果、論戦の歯に衣着せぬ趣があったこと。2つめは、「知識人」＝サルトル本人であり、この講演は、サルトル自身が今までの経験と著作を踏まえてとった（言論上また理論上の）「新しい行動」であること。3つめは、サルトル自身の立場の擁護が、当時の世界の、思想史上の中心問題、すなわち、「歴史的な社会を客観的に説明する論理」と「個人の人生の一回性を主観的に強調する論理」とをどう関係させることができるかということを論じることに、直接繋がっているということ。最後の4つめが、サルトルの他の文章に比べ、日本講演の原稿が、こと内容の豊富で論理の緻密なものの一つであったことである[43]。

加藤はこれを承けて、サルトルのすべての議論の出発点が、根本的な人間の条件として「世界のなかの存在」であることを指摘している。加藤はさらに、これをわかりやすく次のように解説している。

［…］人間が世界をみる（認識の普遍性）み方は、その人間を特殊な歴史的な条件のもとでつくりだした世界の全体によって、規定されている（主観の特殊性）ということである。世界は人間の外にあり、また同時に内にもある。したがって内側の世界をみきわめようとすれば、外の世界にゆきつかざるをえず、外の世界をみようとすれば、内の世界からの規定をまぬがれることができない。外の世界をみるのは、科学であり、科学は、自由な検討を通じて、普遍的な知識に到達するものである。しかしその知識を内側との関連においてみれば普遍的な知識そのものが特殊化される。したがって人間の現実は、普遍的なものと特殊なもの、外在的なものと内在的なもの、観察者の目のまえにあってみえる世界と背後にあってみえない世界、世界の一部分（人間）と世界の全体、の間に成り立つ弁証法的な関係の全体としてしか、あらわれようがないということになる[44]。

「認識の普遍性」は、ある１人の人間の特異な歴史的条件のもとで作り出された「主観の特殊性」に規定されている。もちろん、サルトルの「特異的普遍」で確認したように、個人の「特異性」は、「意味」を通じて、「普遍性」へと還元される。したがって、個人の内面である「内側の世界」は、科学を通じて、「外の世界」である「普遍的な知識」に到達するし、一方、その「普遍的な知識」もまた１人の人間を介在させれば、特異化されてしまう。ゆえに、加藤は人間の現実は、普遍的なものと特異なもの、外在的なものと内在的なものという二者の弁証法的関係を通じてしか現れないと指摘するのである。

こうした二項対立を「特異的普遍」として捉えた加藤は、どのようにして現実の理解のために適用したのだろうか。少し長くなるがたどってみよう。

かくして現実の構造そのもののなかに、対立する二つの軸がある。歴史性対一回性、組織対個人、科学的思考対感情的思考、抽象的な一面性対具体的な個物の全体性、ヘーゲル的普遍性対キェルケゴール的特殊性または個別性。現実を内的斉合性を備えた知的体系に還元するためには、その一方の軸に沿って、現実に接近しなければならないだろう。たとえば社会科学であ

り、またたとえば論理実証主義である。あるいは、詩人の直感であり、実存主義的な哲学である。しかし現実の全体を理解するためには、二つの軸の交点に貼りつけられた人間の位置と、正面から向き合わなければならないだろう。そこから出発して、体系の内的斉合性を手に入れることはできないかもしれない。しかしそれ以外に、人間の現実の全体を知的に理解する、――あるいはむしろ、知的に発見することはできない。一方では、「人間の他に還元することのできない個別性を主張することによって、歴史と対立する実存主義」（「倫理学のためのノート」）が必要であり、他方では「歴史の過程をその全体において明らかにするための最も根本的なこころみ」（「方法の問題」、一九五七）としてのマルクス主義が必要だということになる[45]。

確認しよう。「歴史性対一回性」、「ヘーゲル的普遍性対キェルケゴール的特殊性または個別性」、これらの二項対立は、サルトルの「特異的普遍」に出てきた文言そのものである。問題は、「組織対個人」、「科学的思考対感情的思考」、「抽象的な一面性対具体的な個物の全体性」ということになろう。「組織対個人」という対立は『弁証法的理性批判』の影響が色濃いと言える。さらに、「科学」と「感情」が対置されている。いずれにしても、以上の左項には、「社会科学」と「論理実証主義」が分類され、右項には、「詩人の直感」や「実存主義的な哲学」がおかれている。この「社会科学」というのは、この後に続く文言から分かる通り、マルクス主義のことを指す。加藤は、サルトルが、現実の構造全体を把握するために、人間を実存主義とマルクス主義の交点に置こうとしていたと見てとるのである。

しかしながら、この両者はどちらにも還元されることはないと確認したはずだ。現に、この引用部分においても、「体系の内的斉合性」を手に入れることはできないかもしれないと吐露する。にもかかわらず、加藤は、それ以外に人間の現実を知的に「発見」することはできないとサルトルが理解していたと語るのである。けっして実現できないものを遂行する試み。加藤は、サルトルのこうした科学的方法との格闘を、ヤコブが天使と格闘したことになぞらえた[46]。加藤はこうしたサルトルの苦闘に知識人としてのありようを見ていたと言えるだろう。

このようなサルトルの「特異的普遍」を受け継いだ加藤周一は、次のように「知識人」のあるべき姿を定義づける。

> 知的技術者は、生産のための手段を洗煉して、その目的を問わないものである。手段を洗煉するためには、科学的研究をすすめなければならない。すなわち知的技術者は、その科学的研究において、普遍性をめざす。しかしその仕事の目的は、支配階級の決定したものであり、支配階級の特殊な立場にもとづくものである。このように、自己の内側に内在化された普遍性と特殊性との矛盾を自覚し、のり越えようとして、彼らの仕事の目的そのものを問うときに、知的技術者は、はじめて「知識人」となるのである[47]。

「知的技術者」は、「普遍性」を目指すが、彼ら、彼女ら「知的技術者」に課せられた目的は、この世界を統べる支配階級が決定したものであり、したがって、その拠って立つ特異な立場に基づく。こうした矛盾を「知的技術者」が自覚し、それを乗り越え、問いただすことを通じて「知識人」になることができると加藤は述べる。 その理由は、作家＝知識人の仕事とは、自らのうちに内在化された世界の全体、すなわち特異化された世界をふたたび普遍化することに他ならないからである[48]。それこそが、サルトルにとって「「自己に責任を負う」（アンガジェ）作家」だと加藤はいい、「科学的客観主義（普遍的な知識の世界）」にとどまって支配階級に奉仕する「にせの知識人」と峻別するのである[49]。

ここまで、知識人が自らのおかれた状況に対して自覚的であるように、サルトルと加藤が訴えるのは、鷲巣力が指摘しているように[50]、自由の問題と大いに関係がある。

> 時代のもう一つの特徴は、神が死んだということである。歴史的社会と文化の特定の「状況」のなかで、生き、行動する人間にとって、「状況」を超える絶対者との関係がなくなった。しかし人生は一回限りであるから、当人の立場からみれば、「状況」を超えようとする志向は消えない。人間の精神は、その身体・家族・階級・文化などの「全体」によって条件づけられ、特

定の「状況」によって特定の行動を矯正される。それにも拘らず、その条件と強制を超えて、人間は自由であることができるかどうか。それは人生の意味に係る問題である。サルトルの劃期的な意味のもう一つは、その問題を解いていないとしても、問題に正面からたち向ったということであろう。彼の言葉にしたがえば、外在的な「状況」が内在化され、内在化された「状況」が、当人の行為において、再び外在化される過程での、「小さなずれ le petit décalage」が「自由」であって（『状況第九』、一〇二ページ）、この考え方は初期のサルトルの考えと大いにちがう[51]。

神の死んだ時代、そのなかで、1人の一回限りの人生は、つねに「状況」におかれたものとなる。「人間の精神」は、身体や家族、文化、階級によって否応なしに規定される。それでも、人間は「自由」であることができるのか、あるいは「自由」をえるべく正面から立ち向かうことができるのか。この根本的な問いが知識人に必要不可欠だと、加藤がサルトルから学んだことである。加藤はこのような言葉で結ぶ。「かくして知識人の主な仕事は、不断に、個々の事件に即して、現実からその蔽いをとり除くこと、またみずから人間の根本的な条件の自覚的な表現となることである」[52]。

私たちが加藤の言葉でさらに注目すべきことは、サルトルという哲学者のもう1つの「劃期的な意味」は、「人生の意味に係る問題」を解いていないにせよ、その「問題に正面からたち向った」ことにあると主張している点である。すなわち、2010年代以降において大学などで喧伝される《課題解決能力》などではなく、むしろ本来の哲学の存在意義だとされる《問いをたて、それに正面から立ち向かうこと》そのものこそが重要であるということに積極的意義を見出しているということである。このことは、先のシンポジウムにおいて、澤田直が、加藤はサルトルから「特異的普遍」という考えから影響を受けたのではなく、むしろ、加藤とサルトルがもともと同じような発想を共有していたからこそ、加藤がサルトルに惹かれたのだと指摘したこと、そのうえで、2000年代初頭の徐京植による加藤へのインタビュー「教養に何ができるか」[53] でのサルトルをめぐるやりとりを承けて、加藤が、サルトルに問題の解決を求めるのではなく、サルトルの問

題提起の力に刺激を受けるべきだと考えていたと主張したことと大いに重なり合う[54]。

3　サルトルの知識人論の変容と加藤周一

ところがサルトルは、いわゆる「68 年 5 月」に直面し、それまでの知識人像を大きく変えることになっていった。彼は、1970 年のインタビュー「人民の友」において知識人について次のように定義している。

> 私は彼ら［知識人］を、実践的知識の技術と私が呼ぶようなものの枠内に見出すことができると言うでしょう。実を言えば、すべての知識は実践的です。しかし、このことは最近になってようやくわかったことなので、だから私はこの二語を、一緒に使用しているのです。つまり実践的知識の技術者は、正確な専門分野によって、原則として万人にとって良いことを目指す知識の総体を形成したり、あるいはこれを使用したりするのです。この知は、当然のことですが普遍性を目指しています[55]。

ここでは、サルトルが、知識人を、正確な専門分野に基づいて、万人のために実践的な知識を形成したり使用したりすることで「普遍性」を目指すものだとみなしていることが確認できる。このことは、1966 年 9 月から 10 月にかけてサルトルがボーヴォワールとともに来日した際に催された、ある座談会で、政治学者の坂本義和が、サルトルがおこなった知識人の状況に関する講演[56] を読んで感銘を受けた点として、「人間の「普遍化」に対する強烈な関心あるいは執着が脈打っている」こと、サルトルが「人間の普遍化、人間の解放、人間の真の自由」という場合に、「「他人の解放無くして自分の解放はない」という、人間が存在としてもつ条件を強調して」いることだとサルトル本人に対して語っていることは象徴的であろう[57]。

サルトルは、同時に彼らの知識の全体が概念的であり、普遍的であるにもかかわらず、万人の役には立たず、支配階級とその同伴者に寄与してしまっていると

する。こうした矛盾に自覚的である存在こそが、サルトルにおいては「知識人」なのである[58]。ところが、普遍的であるとも同時に個別的でもあり、あらゆるところで普遍的なものの個別な使用を告発する一方、最大多数の最大幸福のための普遍的な政治の原理を指し示すことに拘泥する、こうした知識人を、彼は「古典的知識人（l' intellectuel classique）」と呼んで批判した。なぜならば、彼らは、矛盾を抱えつつ、それでもこのような矛盾を抱えることそのものが万人に有用だと考えているからである[59]。さらにサルトルは、かつて自らもまた「古典的知識人」であったと述懐する[60]。また「知識人の擁護」では、サルトルは次のように語り、彼らのような存在を「偽の知識人」とも呼ぶのである。「今日からも、普遍主義的視点から物事を捉えるすべての人間は安心を与えます。普遍的なものとは偽の知識人によって成り立っているのです」[61]。

ここではサルトルが、知識人を、正確な専門分野に基づいて、万人のために実践的な知識を形成したり使用したりすることで「普遍性」を目指すものだとみなしていることが確認できる。

サルトルは次のように証言する。彼ら「古典的知識人」は、1968 年 5 月に際しては、学生たちやスト参加者とともにあったかもしれないが、しかし、彼ら自身に対する異議申立て運動でもあることを理解しないため、同じように歩むことはなかった、あるいは場合によっては「五月」に対する敵意すらあったと指摘している[62]。その理由をサルトルは次のように説明する。

> というのも、突然彼らは、〈運動〉が知識人としての自分たちに対して異議を唱えていると感じたからです。それまでは、知識人は他人に援助の手を差し伸べ、他人の思い通りに自己を委ねるはずの者であり、また当然、自分は理論と思想を提供する者として自らを考えていたのに[63]。

他方で、「古典的知識人」に対置するかたちで、「五月」を主導した学生など、完全にこれまでの関係を断ち切って、工場に出かけて労働に従事するような人々について、「彼らのなかで本当に変化した人たちが、普遍的社会を要求している人々、つまり大衆と、直接の関係に入らない限り、もはや普遍的目標を持つ可能

性はない」[64] という留保をおきつつも、彼らに対して大きな可能性を見るのである。そして、もし知識人と労働者の「有機的結合（l' union organique）」を望むのならば、両者の「混合細胞（cellules mixtes）」が必要で、これこそが知識人を変化させる唯一の方法であり、実践の次元において生かす可能性を与えるのだと説くのである[65]。

ところで、加藤周一の指摘によれば、「68 年 5 月」の学生たちが叫んだスローガンや書きつけた立看板には次のような思想家たちの名前があった。だが、「知識人」サルトルの名前はそこにはなかった。

> 反体制運動の指導者たちのイデオロギーは、あらゆる傾向を含み、複雑である。しかし街頭のスローガンや立看板には、しきりに、毛沢東、チェ・ゲバラ Che Guevara, ホー・チミン Ho Chiminh の名まえがあらわれ、マルクーゼの理論的な影響も大きいとされている（トロツキー Trotskii やローザ・ルクセンブルク Rosa Luxembourg の名がよばれることもある）[66]。

それにもかかわらず、いやそうであるからこそ、サルトルは、逆にこうした学生たちに対してシンパシーを覚えた。その後、学生たちは、毛沢東主義に傾倒していくことになるが、サルトルもまた学生たちに引きずられるように、毛沢東主義にシンパシーを抱くようになるのである。

一方、加藤周一にとっても、「68 年 5 月」は衝撃的な出来事であったようである。加藤は「68 年 5 月」の学生たちについて、アメリカ、西ドイツ、フランス、日本では情況がそれぞれ異なると断りながら、雑誌『世界』の 1968 年 8 月号のなかで、それらの共通項を見い出し、次のように「自己の特権の放棄」と「世なおし」として意義づけている。

> ただしアメリカでも学生運動は、一流の大学からおこっていて、そこでは物的な面での学生の優遇が徹底している。アメリカ・西ドイツの場合殊に、日本・フランスの場合にもかなりの程度まで、今日の左翼学生運動に、共通の傾向はこういうことである、── われわれがめぐまれないからもっとよく

しろ、ではなくて、われわれだけがめぐまれているのはけしからぬ、ということ。先にあげたコロンビア大学学生が運動場建設に反対したのは、それが黒人たちから公園の一部を奪うことを意味するからであった。高等教育の機関を労働者たちに解放すべしという要求は、西ドイツ・フランスの学生の側からも出ている。日本の学生のアメリカ軍基地反対運動には、多くの動機が含まれているだろうが、少くともそのひとつが基地周辺の住民の利益であって、学生自身の直接の利益でないことだけは、否定できないだろうと思う[(67)]。

すなわち、加藤にとって「68年5月」とは、「失うべき何ものももたぬ層からの反抗ではなく、自己の特権の放棄、他者の権利の拡大をもとめる抗議の運動」であるとともに、「個別的な争点から出発しながら一般的な社会改革、または「世なおし」へ向う傾向」が著しいものであった[(68)]。加藤もまた、自分自身のことを、独り理性的にトロイの滅亡を予言したような「カッサンドラではない」と断りつつも、この「素晴らしい何ものか」に将来があると信じるのである[(69)]。

上記のように、サルトルと同様、学生たちに将来の希望を見出していた加藤は、毛沢東主義に傾倒する学生と、彼らに追随するかのように毛沢東主義へシンパシーを抱くサルトルとをどのように見ているのだろうか。

かくして実存主義・マルクス主義・新左翼主義ということの内容を検討すれば、サルトルが単純に立場を変えたのではないことは、あきらかである。その思想は、個人の意識から出発して（実存主義）、次第に射程を延長し、歴史と集団を包みこみながら（マルクス主義）、実践と理論との一種の統合へ向おうとした（新左翼の支持）[(70)]。

このように、加藤は、サルトルが実存主義からマルクス主義へ、マルクス主義から新左翼主義へと立場を変えていったのは、単純なものではなく、思想と実践とが一致したものであり、新左翼へと傾斜して行ったのは、実戦と理論の一種の統合の証だと捉えている。だが、毛沢東主義についていえば、サルトルは「私は

マオじゃない」と否定している[71]。これについて加藤は、サルトルは毛沢東主義者を支持しただけであって、毛沢東主義者になったわけではないと説明している。この辺りは、50年代のサルトルと共産主義との関係にも似ているが[72]、いずれにしても、こうした方針をサルトルがとった理由として、無名の青年たちを弾圧から守ろうとしたためだと加藤は述べている。

> 新左翼主義という言葉は、そのなかに多くの異る立場を ── 実践的な意味でも、理論的な意味でも ──、含む。フランスの「毛沢東主義」についていえば、サルトルは毛主義者を支持したので、毛主義者になったのではない。「私は毛主義者ではない」(「フランスの毛主義者」、一九七二)。しかし何故支持をしたのだろうか。実践的な面では、無名の青年たちの運動を権力の弾圧からまもろうとしたからである。街頭で雑誌を配る青年たちを政府は逮捕していた。そのことは広く世間に知られないままで過ぎる。有名な、── 国際的には、フランスの作家のなかで、もっとも有名な作家が、同じ雑誌を同じ街頭で配れば、政府は彼を逮捕して弾圧を世界中に広告するか、逮捕しないで法の前の平等という原則をみずから破るか、二つのうちいずれかを択ばなければならなくなるだろう。その撰択を政府に強制することは、青年たちとサルトルとのちがいを通じて、人間としての平等を具体的に示すことである。特権はそれを利用することによってのみ廃止することができる。毛主義者たちへの支持は、サルトルの側において、倫理的な意味をもっていたにちがいない。理論的な面では、管理社会のなかで分断され(「原子化」)、中産階級化された大衆(分離された個の集りとしての集団 série)が、統一された意思をもつ集団 groupe に転化する場合、── その転化の過程での人間の自由の現実化という場合の一つを、毛主義者の主張に認めていた。すなわちフランスの毛沢東主義を、『弁証法的理性批判』の理論的枠組のなかで理解できるように、理解していたということになる[73]。

政府側も、フランスのなかでも最も有名な作家であるサルトルが雑誌配りをしていても、青年たちのようには、なかなか弾圧できない。もし、有名であるがゆ

えに政府がサルトルを弾圧しなければ、青年たちとサルトルとの間で対応に違いがあったということになり、反平等ということで政府は非難される。もしくは、仮に政府側がサルトルを弾圧しても、その行為は国際社会から非難を受けるだろう。それを見越してのサルトルによる行動である。そうした実践面での戦略と、理論面での毛沢東主義と『弁証法的理性批判』との一致を見ていたというように、加藤はサルトルのこの時期の行動を評価していることになる。しかしながら、実践面はともかく、理論面では『弁証法的理性批判』の枠内で毛沢東主義をサルトルが理解していたとするならば、「私はマオではない」とサルトルが否定したことと矛盾してしまうことになるのである。

おわりに

以上、サルトルの後期主要概念である「特異的普遍」を鍵概念として、加藤周一がサルトルの知識人論をどのように受け継いだかについて検討した。それにあたって、まずサルトルの「特異的普遍」概念を概略説明し、この概念がいかに彼の知識人論において占めている位置を加藤周一がどれほど重要視しているのかについて論じた。そこでは、加藤がサルトルの弁証法について、「特異性」と「普遍性」との相互の往復運動とみなしたうえで、人間理解にあたり、人間を個人のかけがえのなさと歴史との交点においていることが明らかとなった。

つぎに加藤が、「特異的普遍」に基づくサルトルの知識人論のあり方をどのように理解しているかについて考察した。加藤はサルトルに従いながら、支配階級によって目的を課されたという点であくまで特異な立場に立脚した「知的技術者」は、「普遍性」を目指すという点で矛盾した存在であるが、こうした矛盾を「知的技術者」が自覚し、それを乗り越え、問いただすことを通じて「知識人」になることができると考えているということが理解された。

そこでは、サルトルが「特異性」と「普遍性」とをいかに統合するかに腐心している姿が明らかになった。ところが、「内側の論理」と「外側の論理」、実存主義とマルクス主義的歴史哲学、あるいはキルケゴールを代表とする特異性と、ヘーゲルを代表とする普遍性とでは、「理論的な統合」は不可能だと加藤は主張

する。一方で彼は、「一個の具体的な人間は、内側と外側の条件、超歴史的実存と歴史内的存在とが、そこで出会う全体であり、事実上の統合は常に、避け難く、あたえられている」とも述べている[74]。理論的には、内側の論理は外側の論理へと開き、外側の論理は内側への論理へとたえず開く以上、両者の統合は不可能である。しかし、1人の具体的な人間は事実として、1回の生涯を送ること、そして同時にその生涯が歴史的文脈に置かれる以上は、両者は統合された形で1人の人間に事実上統合されていると言わざるを得ないのだろう。そこに、加藤はサルトルの知識人像を理想化しつつも、サルトルの困難さを理解したと言える。加藤は、こうしたサルトルの苦闘の理由を、ヤコブになぞらえながら、「まさに人間的な心の文明をまもるために」と解説している[75]。

最後に、サルトル本人が「68年5月」以降に、理想とする知識人像をどのように改めたか、また加藤周一はどのように「68年5月」をリアルタイムで知識人論において捉えたか、以上の2点について明らかにした。そのうえで、加藤がサルトルの知識人論の変容をどのように解釈したかについて討究したが、加藤が、サルトルのスタンスの変化は、単純なものではなく、柔軟性をもちながら従来の思想と行動とを一致させた一貫性のあるものだと理解していることが明確化された。

上記を踏まえれば、加藤が、「特異性」と「普遍性」とを往復しながらも両者の統一に腐心し、支配階級から与えられた「知的技術者」としての役割という矛盾に自覚的であれとするサルトルの知識人としてのあり方を、実践面では戦略的に柔軟性をもたせながらも、理論的には終始一貫したものとして肯定的に評価していることが見て取れるのである。

注

（1） 本稿は、2018年1月27日に日本仏学史学会第488回月例研究発表会で報告した発表「特異的普遍としての知識人 ── 加藤周一とサルトル」を大幅に加筆修正したものである。また、2019年10月26日に行われた第44回社会思想史学会大会セッション B「戦後思想再考」のテーマ「戦後日本思想におけるサルトルとフランクフルト学派」での報告（「サルトルの日本受容 ── 加藤周一と鈴木道彦による「特異的普遍」のアンガージュマン」）は、本稿の内容と一部重複する。

（2） 加藤周一『羊の歌 ── わが回想』［1968年］、『加藤周一著作集14：羊の歌』、平凡社、1979年、179-188頁。なお、『羊の歌』は自伝であるため、この頃の彼に関する実証的研

究として、鷲巣力『加藤周一を読む ――「理」の人にして「情」の人』、岩波書店、2011 年、43 頁以下；同『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか ――『羊の歌』を読みなおす』、岩波書店、2018 年、242 頁以下なども併せて参照のこと。

（3） 加藤周一『続・羊の歌 ―― わが回想』［1968 年］、『加藤周一著作集 14：羊の歌』、平凡社、1979 年、265 頁以下。

（4） 同書、399 頁以下。

（5） 同書、404 頁。

（6） 海老坂武『加藤周一 ―― 二十世紀を問う』、岩波新書、2013 年、44-45 頁。

（7） 海老坂武「加藤周一とフランス」、菅野昭正編『知の巨匠　加藤周一』、岩波書店、146-147 頁。

（8） 加藤周一「西洋文学とは何か」［1988 年］、『加藤周一著作集 16：科学技術時代の文学』、平凡社、1996 年、165-168 頁。

（9） 同論文、168 頁。

（10） 加藤は「特殊性」という言葉を用いているが、明らかにサルトルにおける「特異性（singularité）」概念のことを指しているだろう。

（11） 加藤周一「知識人の任務」［1947 年］、『加藤周一著作集 8：現代の政治的な意味』、平凡社、1979 年。

（12） なかでも代表的なものが、サルトル研究者である海老坂武であろう（海老坂武『戦後思想の模索 ―― 森有正、加藤周一を読む』、みすず書房、1981 年；『加藤周一 ―― 二十世紀を問う』、岩波新書、2013 年）。海老坂は、サルトルと加藤周一の類似を指摘した上で、加藤の自伝である『羊の歌』の冒頭部分が、サルトルの自伝である『言葉』に非常に似ているという点を強調する（海老坂武「加藤周一とフランス」、前掲論文、136 頁）。また、若手研究者では、福永武彦を中心に、「マチネ・ポエティク」についての研究も多い岩津航の名前が挙げられるだろう。岩津は、三浦信孝（三浦信孝「加藤周一と日仏会館 ――「私のヴァレリー」に寄せて」、『現代思想：総特集＝加藤周一』、青土社、2009 年 7 月臨時増刊号）と同様に、加藤周一とヴァレリーの関係を論じるほか（岩津航「加藤周一とヴァレリー ―― 知性の仕事としての象徴主義」、坂巻康司編『近代日本とフランス象徴主義』、水声社、2016 年）、加藤が『日本文学史序説』でフランス文学史を援用している意義について明らかにしている（岩津航「加藤周一とフランス文学史 ――『日本文学史序説』の方法について」、『金沢大学歴史言語文化学系論集：言語・文学篇』、金沢大学歴史言語文化学系紀要委員会、第 9 号、2017 年 3 月）。石田英敬は、本稿と同様、知識人としての加藤周一を取り上げている。そこでは、加藤を福澤諭吉や中江兆民などの明治以降の日本の近代が生み出した「啓蒙」の系譜に位置付け、それこそが加藤を「普遍的知識人」にしたとして、加藤の「啓蒙」を考えるに当たり、「「翻訳」の態度」、「人文学的態度（attitude humaniste）」、「倫理的態度（attitude éthique）」の 3 つの観点から分析している（石田英敬「啓蒙とは何か ―― 普遍的知識人のエートスについて」、ジュリー・ブロック編『加藤周一における「時間と空間」』、かもがわ出版、2012 年）。

（13） 片岡大右「加藤周一とフランス 2：加藤周一とド・ゴール」、『ふらんす』、白水社、2017 年 5 月号、60-61 頁；同「加藤周一とフランス 3：加藤周一とサルトル」、『ふらんす』、白水社、2017 年 6 月号、60-61 頁；同「加藤周一とフランス 4：加藤周一とクレマンソー」、『ふらんす』、白水社、2017 年 7 月号、60 頁。

（14） 澤田直「文学とは何か ―― 加藤周一、サルトルそして独自的普遍」、国際シンポジウム「加藤周一の知的遺産と世界の中の日本」、日仏会館、2019 年 9 月 22 日。筆者は、当日、

時間の都合で割愛された部分も含めて、澤田氏から発表原稿をご恵贈いただいた。氏のご厚意に深甚の感謝を申し上げたい。なお、澤田の本発表や、後に引用する小熊英二の論考も含めた本シンポジウムの記録については、その記録論文集が水声社より 2020 年中に刊行される予定である。

(15) 成田龍一『加藤周一を記憶する』、講談社現代新書、2015 年、226 頁以下。

(16) 成田龍一「加藤周一と百科事典編集」、大江健三郎・鶴見俊輔ほか『冥誕 ── 加藤周一追悼』、かもがわ出版、2009 年；龍澤武「『大百科事典』編集長としての加藤周一さん」、大江健三郎・鶴見俊輔ほか『冥誕 ── 加藤周一追悼』、かもがわ出版、2009 年；鷲巣力『加藤周一を読む』、前掲書、242 頁以下；石田英敬、前掲論文、72-73 頁。

(17) 西川長夫『決定版　パリ五月革命　私論 ── 転換点としての 1968 年』、平凡社ライブラリー、2018 年。

(18) 加藤周一「サルトル私見」［原題は「サルトル」］、『加藤周一著作集 16：科学技術時代の文学』、平凡社、1996 年。

(19) 同論文、174 頁。

(20) 同論文、174-175 頁。

(21) 同論文、177-178 頁。

(22) 同論文、179 頁。

(23) 以下は、竹本研史「個人の実践と全体化の論理 ── ジャン＝ポール・サルトルにおける特異性の位相」、東京大学大学院総合文化研究科博士号学位請求論文、2019 年、第 7 章、またその元となっている既発表、Kenji TAKEMOTO, « Contre le savoir mort : À propos de l'“universel singulier” chez Jean-Paul Sartre »、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第 93 号、2008 年 9 月からその概要だけ取り出したものであり、詳細についてはそれらを参照されたい。

(24) Jean-Paul Sartre, *Situations, IX : mélanges* [1972], Paris, Gallimard, 1987, p. 152-190（『サルトル全集 37：シチュアシオン IX 』鈴木道彦ほか訳、人文書院、1974 年、121-151 頁）.

(25) Jean-Paul Sartre, *Questions de méthode*, in : *Critique de la raison dialectique*, précédé de *Questions de méthode* [1957], Texte établi et annoté par Arlette Elkaïme-Sartre, Tome I, Paris, Gallimard, 1985（『サルトル全集 25：方法の問題 ── 弁証法的理性批判序説』平井啓之訳、人文書院、1962 年）. 以下、*QM* と略記。

(26) ただし注意しなければならない点は、サルトルが、「特異的普遍」や『方法の問題』では、キルケゴールの特異性を擁護すると同時に、あまりに特異性を特権化し過ぎるその思想に対しても批判しているということである。またサルトルの思想的方法論は、もともと彼が批判対象としているヘーゲルの弁証法にかなり依拠しており、彼の思想においては、普遍性についてもつねに重きが置かれている。

(27) Jean-Paul Sartre, *L'Idiot de la famille : Gustave Flaubert de 1821 à 1857*, Paris, Gallimard, Tome 1, 1971, p. 7-8（ジャン＝ポール・サルトル『家の馬鹿息子 ── ギュスターヴ・フローベール論（1821 年から 1857 年まで）』平井啓之ほか訳、人文書院、第 1 巻、1982 年、5-6 頁）. 以下、*IF* と略記。

(28) *IF*, p. 7-8（『家の馬鹿息子 1』、5 頁）.

(29) *QM*, p. 24（『方法の問題』、21 頁）.

(30) Jean-Paul Sartre, *Situations VIII : autour 68* [1972], Paris, Gallimard, 1980, p. 399（『サルトル全集 36：シチュアシオン VIII 』鈴木道彦ほか訳、人文書院、1974 年、294 頁）. 以

下、*S VIII* と略記。

(31) *S VIII*, p. 419（『シチュアシオン VIII』、308 頁）.

(32) この「知識人の任務」の献辞は、戦中数少ない信頼できる知識人の 1 人として加藤が師事していた渡辺一夫に宛てられている。

(33) 加藤周一「知識人の任務」、前掲論文、67-68 頁。

(34) 小熊英二は、加藤の「事実判断」と「価値判断」という言葉から、加藤自身も含めた、第二次大戦期に「高見の見物」をしていた日本の知識人たちの「傍観者」ぶりを批判しながら、加藤がこれを「文学」の問題として考えた、とする非常に重要な論考をおこなっている（小熊英二「沈黙する羊、歌う羊 —— 戦後思想における加藤周一」、『世界』、岩波書店、2020 年 2 月号）。

(35) Jean-Paul Sartre, *Situations, II : Littérature et engagement* [1948], Paris, Gallimard, 1999（ジャン＝ポール・サルトル『文学とは何か』加藤周一ほか訳、改訳新装版、人文書院、1998 年）.

(36) 加藤周一「サルトル私見」、前掲論文、266-267 頁。

(37) 同論文、272 頁。

(38) 同論文、272-273 頁。

(39) 同論文、277 頁。

(40) 同論文、277 頁。

(41) 同論文、277-278 頁。

(42) 同論文、277-278 頁。

(43) 加藤周一「サルトルの知識人論」[1966 年]、『加藤周一著作集 2：現代ヨーロッパ思想註釈』、平凡社、1979 年、328-329 頁。

(44) 同論文、329-330 頁。

(45) 加藤周一「サルトル私見」、前掲論文、179 頁。

(46) 加藤周一「人間学または『状況第九』の事」、『加藤周一著作集 2：現代ヨーロッパ思想註釈』、平凡社、1979 年、336 頁。

(47) 加藤周一「サルトルの知識人論」、前掲論文、330-331 頁。

(48) 同論文、330-331 頁。

(49) 同論文、330-331 頁。

(50) 鷲巣力『加藤周一を読む』、前掲書、254 頁以下。

(51) 加藤周一「人間学または『状況第九』の事」、前掲論文、335-336 頁。傍点は引用者。

(52) 加藤周一「サルトルの知識人論」、前掲論文、331 頁。

(53) 鷲巣力編、加藤周一『『羊の歌』余聞』、ちくま文庫、2011 年、294 頁。

(54) 澤田直「文学とは何か —— 加藤周一、サルトルそして独自的普遍」、前掲発表。

(55) *S VIII*, p. 456-457（『シチュアシオン VIII』、336 頁）.

(56) この講演とは、改稿されて『シチュアシオン VIII』に収められた一連の日本講演「知識人の擁護」のことである。*S VIII*, p. 375-455（『シチュアシオン VIII』、276-335 頁）.

(57) ジャン＝ポール・サルトルほか「現代状況と知識人」[1966 年]、『加藤周一対談集 2：現代はどういう時代か』、かもがわ出版、2000 年、212-213 頁。なお、この座談会は、1966 年 10 月 12 月に開催された。出席者は、サルトル、ボーヴォワールのほかに、大江健三郎、坂本義和、鶴見俊輔、日高六郎であり、彼らは座談会にあたって、事前に「知識人の擁護」の講演原稿を読んだうえで臨んでいる。また司会は加藤周一、通訳は鈴木道彦、加藤晴久が務め、この座談会の記録は岩波書店の雑誌『世界』、1966 年 12 月号に掲載されている。

(58) *S VIII*, p. 457（サルトル『シチュアシオン VIII』、336-337 頁）.
(59) *S VIII.*, p. 457-459（『シチュアシオン VIII 』、337-338 頁）.
(60) *S VIII*, p. 468（『シチュアシオン VIII 』、345 頁）. このように、かつて自分もそうであった「古典的知識人」を批判するサルトルだったが、鈴木道彦は、この日本講演からしばらく経った 1970 年代のサルトルについて、一方でフローベール論（『家の馬鹿息子』）により 60 年代の知識人を肯定しながら、他方でその「古典的知識人」を自ら批判することで「七〇年代の先端を歩こう」としているきわどい矛盾した彼の「綱渡り」を、「いくぶんかの不快感を抱いて眺めた」と振り返っている。鈴木道彦『異郷の季節［新装版］』、みすず書房、2007 年、228 頁。
(61) *S VIII*, p. 410（『シチュアシオン VIII 』、302 頁）.
(62) *S VIII*, p. 461（『シチュアシオン VIII 』、339 頁）.
(63) *S VIII*, p. 461（『シチュアシオン VIII 』、339 頁）.
(64) *S VIII*, p. 464（『シチュアシオン VIII 』、342 頁）.
(65) *S VIII*, p. 475（『シチュアシオン VIII 』、350-351 頁）.
(66) 加藤周一「世なおし事はじめ」[1968 年]、『加藤周一著作集 8：現代の政治的な意味』、平凡社、1979 年、276 頁。
(67) 同論文、274 頁。
(68) 同論文、274-275 頁。
(69) 同論文、285 頁。
(70) 加藤周一「サルトル私見」、前掲論文、183 頁。
(71) Jean-Paul Sartre, *Situations X : Politique et autobiographie*, Paris, Gallimard, 1976, p. 38（『サルトル全集 38：シチュアシオン X 』鈴木道彦・海老坂武訳、人文書院、1977 年、35 頁）.
(72) 竹本研史、前掲博士論文、第 3 章を参照のこと。
(73) 加藤周一「サルトル私見」、前掲論文、182-183 頁。
(74) 加藤周一「サルトルのために」、前掲論文、349-350 頁。
(75) 同論文、349-350 頁。